

『タイガーマム』とアジア系アメリカ人の教育達成研究

Battle Hymn of the Tiger Mother and
Educational Research on Asian American Educational Achievement井口 博充*
Hiromitsu Inokuchi**Abstract**

In this paper, I explore Amy Chua's *Battle Hymn of the Tiger Mother* as a biographical account of child rearing by a second generation Asian American. In recent years, education research on Asian Americans has become an important field of inquiry as Asian immigrant children are seemingly very "successful" in terms of education. Chua's book is worth discussing because this work is a very rare attempt by an Asian American parent to write about her own experience of child rearing. I examine Chua's account by situating it in the context of educational research on Asian American educational achievement in the United States.

First, I review quantitative and qualitative educational research literature on the educational achievement of Asian Americans in relation to the Asian American model minority thesis, a stereotype that distorts how Asian Americans are seen in the United States. The examination of a number of quantitative research studies, finds no specific cultural determinant that affects Asian American students' high educational expectations. Also, while Asian Americans in general are found to be high achieving, there are differences among Asian subgroups in terms of test scores, grades, and family backgrounds. In addition, four qualitative studies are examined. Overall, they reveal the diversity among Asian American students, and differences in socio-economic backgrounds can make a big difference in educational experience even among the same ethnic group.

In the final section, I go back to Chua's account. After introducing her distinct style of very strict child rearing that she considers the "Chinese" way, I interpret it by using the framework of existing educational research. I offer some criticism from the point of the Asian American model minority thesis and point out a few pit falls.

* 成蹊大学アジア太平洋研究センター客員研究員、Visiting Research Fellow, Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University
E-mail: hi2@buffalo.edu

I. はじめに

2011年に出版された*Battle Hymn of the Tiger Mother* (『虎のような母親の戦いの歌』、以下『タイガーマム』)は、中国系移民二世の大学教授エイミー・チュアによって書かれた彼女が2人の娘を育てた子育てのメモワールである。この本は、その子どもに自由を与えない厳しい子育てによって、アメリカ社会に大きな論争を引き起こした。ところで、アジア系移民の増加に伴って、彼らについての教育研究も盛んになってきたが、彼らの高い教育達成が社会的に評価される一方、それが本当に社会的平等と結びついているのかという批判的な視点からの研究も1990年代以降なされてきている。この論文では、チュアの著作をそれらの研究の中に位置づけて、検討してみたい。

チュアの教育観、さらに教育達成に対する価値観は、80年代後半から増え続けている中国本土からのアメリカに渡ってきた留学生、韓国系の留学生などと共通したものがあるといえる。高い教育達成を武器にアメリカ社会で成功を目指すという生き方である。これまでの研究から一般的にアジア系の教育達成が高いことはわかっていたが、実際にアジア系移民の家庭でどのような子育てが行われているか、実際にアジア系の親によって書かれたものはほとんどなかった。そういう意味で、チュアの著作に注目することは、大きな意義があるだろう。

II. アジア系アメリカ人模範的マイノリティ説

エイミー・チュアは、アメリカ生まれの2世であるが、彼女の家系は代々学者の家系で、1930年代に福建省からフィリピンに移り住み、彼女の父親は1960年に留学生としてアメリカに移民して来た。どこの国のパスポートを持っていたのかは、書かれていないが、おそらくフィリピンであろう。しかし、彼の人種・民族的アイデンティティは、明らかに中国人である。しかし、アメリカ社会の中でどのように見られるのかはまた別の問題である。

合衆国では、中国人、日本人、韓国人はもちろん、タイ、ベトナム、インドネシアといった東南アジア諸国の出身者、さらにインド、バングラディシュといった南アジア諸国の出身者まで含めてアジア系アメリカ人と呼ぶことが多い。そういう意味で、アジア系アメリカ人とは、合衆国社会のある種特定の「人種的構造」の中で成立してきたカテゴリーであり、アジア系アメリカ人の合衆国における教育体験に関する研究は、政治的な真空の中で行われてきたわけではなかった (Omi and Winant 1986)。アメリカ政府は、その移民政策を通じて、アジア系アメリカ人という社会的なカテゴリーの形成に直接の影響を与えてきた。チャンドラ・タルパド・モハンティは次のように述べている。

あからさまに国籍を理由にした最初の法律が1882年の中国人排斥法であった。1907年の紳士協定は日本人と韓国人の数を削減し、1917年の法律は、インド人の移民を禁止した。1924年のアジア人排斥法はアジア本土からの労働移民を終わらせ、1934年のタイディングス・マクダフィー法は、フィリピンの移民が帰化することによってアメリカ市民権を取ることを禁止した。1924年から1943年までの間、帰化は全てのアジア人に認められていなかった。1943年から1960年代の半ばに至る移民法が自由化された時期においても、国家がアジアからの移民に対して割当制を設けていた。割当がもらえるのは、大学を出たか、技術的訓練を受けたか、あるいは特別な経験がある専門職だ

けであった (Mohanty 1991: 25)。

モハンティは、「黄禍」とか「模範的マイノリティ」というアジア人、アジア系アメリカ人に対するステレオタイプの形成は、「国家の経済的緊急性と不平等なシステムに深く根ざしている移民法の固有の歴史」と関連しているとしている (Ibid.: 25)。そして、この歴史は黒人—白人間の関係史とは異なるものの、それでも合衆国の人種化の過程とレイシズムの働きを示すものである。

アジア系アメリカ人の教育達成と社会移動の研究は、1970年代前半から社会学とその関連分野で重要な研究領域となったが、その始まりは人種と教育についての政治と関係していた。社会人口学者であったウィリアム・ピーターセンは日系アメリカ人に関する多数の論文をレビューして (1971)、日系アメリカ人の事例は、「過去における抑圧が現在の進歩を妨げるという理論的一般化のみごとな例外となっている」(Petersen 1971: 4) という説を提起した。ピーターセンは、「ニグロ」などその他の「問題ある」マイノリティに比べて高い教育達成を成し遂げているとして (Ibid.: 3)、日系アメリカ人を賞賛した。ピーターセンは、日系アメリカ人は人種差別にもかかわらず成功したと主張した。この見方は、後にアジア系アメリカ人模範マイノリティ説として広く信じられるものとなった。ここで注目しなくてはいけないのは、ピーターセンが日系アメリカ人の成功事例を引き合いに出すことにより、リンドン・ジョンソン大統領の黒人の経験は、他の移民の経験とは根本的に異なっているとみなす市民権運動の視点を批判しようとしたという点である (Chun 1980; Plambo-Liu 1999)。

アジア系アメリカ人の学者の中には、アジア系アメリカ人模範マイノリティ説はあまりに単純であるとして批判する者もあった。ボブ・スズキは、このような批判をした1人で、アジア系アメリカ人の教育達成は改善しているが、まだ彼らは白人と同じような社会経済的地位を得られていないとしている (Suzuki 1977)。スズキは、アジア系アメリカ人が白人と同等な社会経済的地位を得るためには、白人より相当高いレベルの教育を達成しなければならないと示唆している。すなわち、それは人種差別、レイシズムがアジア系アメリカ人の教育体験に影響を与えているということである。スズキの議論は、既存文献のレビューと60年代後半から70年代前半のデータ (1970年のUSセンサスとアメリカ政府の統計) によるものであった。彼が議論しているのは、主に親や祖父母の世代が20世紀前半に移民してきたアジア系アメリカ人の2世、3世についてであった。

スズキは、模範的マイノリティ説のより総合的な分析をするためには、「いろいろな理論の妥当性を検討するための実証的データ」がさらに必要だとしている (Ibid.: 45)。しかし、彼は、ある理論は、しばしば特定の方法、方法論と結びついており、「ある種の [理論的な] 見方が採られると、研究の解釈と結論に影響を与えるばかりでなく、その研究に用いられる方法も影響される」 (Ibid.: 46) としている。彼は、「アジア系アメリカ人の成功」をアジア的文化価値や規範のためだとする文化決定論は、人口論や質問調査による研究としばしば関連があり、一方、成功を社会動態やシステム (とアジア系アメリカ人のそれに対する対応) との関連から理解しようとする社会歴史的パースペクティブを重視する理論は、フィールドに基づく調査や参与観察、自由面接をより用いる傾向があるという見方をしている。

III. アジア系アメリカ人の教育的成功：競合する説明理論

チュアの家族は、教育的には非常に成功している。先に述べたように、チュアの父親は大学教授として仕事を心得、最終的にはカリフォルニア大学バークレー校の教授となった。エイミー自身は、長女でハーバードを卒業して法学博士、法学部教授となり、次女ミシェルはイェール大学を卒業して法学博士、三女ケイトリンはハーバードを卒業、医学博士となっている。なぜ、このように成功できたのであろうか。また、このように高い動機付けは、何によっているのだろうか。

1980年代後半に、アジア系アメリカ人の高い教育達成についての議論が再燃した。合衆国の移民法が自由化された1965年以降、アメリカには、アジアからの移民が大量に流れ込んだ。そして、彼らの子どもたちは、問題なく成長して、アメリカの教育システムのなかで高い達成を成し遂げているように考えられていた。幾人かの学者が、この現象を説明、理論化しようと試みた。例えば、ハーシュマンとウォン (Hirschman and Wong 1986) は、日系と中国系アメリカ人の歴史的に見て高い水準の教育達成を、職業構造の変化と受けた教育が職業的に還元される率が高いことによって説明した。同様に、リーとロング (Lee and Rong 1988) は、近年の移民を含むアジア系アメリカ人の高い教育達成を、彼らの家族構造、次の世代に機会を保証すること (教育への投資)、さらに高い教育達成によってエスニック経済の中で有利な分野に進出できることによって説明した。

1980年代後半から1990年代前半にかけて、教育研究者一般、特に教育人類学者たちは、マイノリティ生徒の学業不振 (あるいは学問的成功) の原因について、非常に真剣な、ときとして感情的な論争を行ってきた。学業不振を説明する上で、かつてはこの分野で支配的だった生物学的決定論は、文化人類学的あるいは文化不接合理論 (cultural disarticulation theory) の立場 (例えば、Spindler 1987; Trueba 1987) からは激しく批判された。文化不接合の理論家は、マイノリティ生徒の学校での不振は、彼らの家庭と学校での文化的差異に起因しており、その二つの文化が不接合を起こしているからだとした。ここでは、「文化」がアメリカの学校でのマイノリティ生徒の学業不振の説明として用いられた。

しかし、文化不接合の理論家も批判にあった。ジョン・オグブなど (例えば Gibson 1988) 自らの立場を文化生態学理論 (cultural-ecological theory) と呼ぶ人々は、マイノリティを3つのカテゴリー (自律的、移民、強制された) に分け、黒人やネイティブ・アメリカンなど強制されたマイノリティの低学力を全般的に差別的な社会、政治システムと不平等な社会階層の歴史 (とその遺産) の結果であると説明した。言い換えれば、マイノリティ集団間の教育達成の差異は、その集団の社会歴史的な状況と関連しているということである。ギブソンとオグブ (Gibson and Ogbu 1991) は、彼らの議論を補強するため、国際的な比較のできるマイノリティ集団、例えば日本の在日朝鮮人の事例を集めた。しかし、彼らの比較の仕事は、未だ不十分である (Inokuchi and Nozaki 2005)。これに対する反論として、文化不接合の理論家は、どのようなマイノリティ集団の中にもその集団内に未だに差異が存在していることを指摘している (Trueba 1988; Nozaki 2000も参照)。明らかに、アジア系アメリカ人はこの論争の中で、特別な場所に位置付けられており、アジア系アメリカ人は内部的に差異があるが、成功している移民集団の注目すべき代表として見なされている。

アジア系アメリカ人の教育という領域では、心理学者であるスーとオカザキが複数の競合する理論を整理するための枠組みを提供している。彼らは、アジア系アメリカ人の高等教育での教育達成についての既存の文献を検討して、3つの理論に分けている、遺伝的視点 (例えば、知能)、

文化仮説（例えば、家族の価値観と社会化への期待）、そして彼らがいうところの相対的機能主義という見方である（Sue and Okazaki 1990: 914-919）。これまでの研究をレビューして、実証的な研究は、遺伝的視点を論駁すると結論づけた。また、これまでの研究からは、「アジア系アメリカ人の教育達成と強く相関して、異なる達成パターンを説明できるような文化的要因を見つけることは困難である」としている（Ibid.: 917）。さらに、スーとオカザキは、「遺伝的説明と同様、アジアの文化という説明に焦点を絞ることは、広い社会の重要な文脈的な要因を軽視することになる」と警告している。

スーとオカザキは、より複雑なモデルについて以下のように述べている。「それは、文化的価値や社会化パターンが、より達成と強い相関を示すと考えられる媒介変数（より親近性のある努力とか動機づけといった変数）に影響を与えるとようなモデルだと仮定される。その媒介変数は、文化以外の他の変数、例えば、人生の他の領域を切り開くような機会などによっても影響を受ける（Ibid.）。

要するに、スーとオカザキの相対的機能主義モデルは、アジア系アメリカ人が社会的な不利を克服するために合理的な決定を行うというものである。彼らは、アジア系アメリカ人がアメリカ社会における構造的な悪条件と差別を克服するために、学業達成という領域で、より一層の努力をしていると主張する。この論文は、アジア系アメリカ人研究者による問題設定的なもので、アジア系アメリカ人の学校体験の研究が、それ自体として学問的知識のための重要で豊かな分野であることを示唆している。明らかにこの論文は、量的研究を意識して書かれたものであったが、その後この分野の研究者によって、方法、方法論にかかわらず、最もよく引用される研究の一つとなった。

IV. 近年の量的研究：理論を検証する

アジア系アメリカ人のサブグループ間の差異は、どのようなものであろうか。また、サブグループ内では、何が差異をもたらすのであろうか。チュアにとっては、「世代」の問題は重要な要素であった。チュアが恐れているのは、家族が凋落することである。彼女は、繁栄は決して三代は続かないとする中国の格言を案じている。彼女の理解によると、三世は、一世や二世が働いて蓄積した財産があるので、快適な中産階級に育つことになる。何よりも、チュアが問題だと思っているのは、彼らは合衆国憲法によって個人の権利が保証されていると思っているため、親の言うことをよく聞かないことだという。結果として、三世は凋落していくと考えられており、それがチュアの心配の種となっている。このチュアの世代に関する理解は、研究に照らして正しいだろうか。

競合する理論と研究は、人種、民族とアジア系アメリカ人の教育結果の関係を探るための道具としてどのように働くのだろうか。バリンジャー、タケウチとゼノスは、1980年のUSセンサスデータ（韓国系、インド系、ベトナム系の十分な大きさの人口サンプルを含む初めての調査であった）を使って、教育水準、職業威信と、6つの異なったアジア系アメリカ人の民族サブグループ（日本人、中国人、フィリピン人、韓国人、インド人、ベトナム人）の24才から64才の収入の関係を調べて、白人、黒人、ヒスパニックの場合と比較した。記述統計に加えて、多変量解析を行った結果、「アジア系アメリカ人の高い教育水準は、高い職業威信スコアと結びついているものの、特に、近年の移民の場合には、高い威信スコアと収入の間にはズレがある」ことがわかった（Barringer, Takeuchi and Xenos 1990: 160）。筆者たちは、この結果は、構造的な障壁

(搾取や差別)のために、アジア系アメリカ人が白人と比べて、同じレベルの教育があっても同じレベルの収入を達成することが妨げられているという仮説を支持していると論じている。

ロングとグラントは、1979年のUSセンサスの最新人口調査を基に、アジア系移民の14才から24才の青年の教育達成の世代間格差(学校へ行った年数で計っている)を調べ、ヒスパニックと(非ヒスパニック系)白人の教育達成と比較している(Rong and Grant 1992)。ここでの問題は、1世(移民自身)、2世(移民の子ども)と3世以降(筆者は、「現地の人」と呼んでいる[Ibid.: 628])で、学校で受けた教育の年数に関してどのように異なっているかということである。重回帰分析を用いて、ロングとグラントはアジア系のなかで、2世が1世よりも高い教育達成をしており、その達成の水準は3世以降も同じである。白人の場合は、2世が一番高く、それ以降の世代では下降している。ヒスパニックの場合は、後の世代になるに従って上昇している。筆者は、続いて2つの理論を検討している、文化不接合理論と文化生態学理論である。彼らは、ヒスパニックについては前者がより良く当てはまり、白人とアジア系は、より後者に近いと結論づけている。最後に、サブグループ間での差異が検討でき、より個人的な特徴、動機付けの要因や社会環境の影響も取り扱えるようなより詳細で、文脈に沿った研究の必要性を指摘している。

量的調査では、たびたび大規模な、生徒のテストの得点や学校での成績を含んだ2次データ資料が用いられている。例えば、カオとティエンダは、1988年の全国教育経年調査から8年生の数学、読本のテスト得点、成績、大学進学に対する意欲という変数を用いて、白人、アジア系、ヒスパニック、黒人といった人種的に異なる移民集団について、世代が教育達成にどのような影響を与えているかを測定した。ちなみに、この1988年調査は、アジア系アメリカ人の人口データをオーバーサンプリング(過剰抽出)しているので、質的調査の研究者が彼らの教育体験について意味のある統計分析ができるものであった。

カオとティエンダの研究(Kao and Tienda 1995)では、重回帰分析を使って、移民であることとその世代がテスト得点と成績に与える影響は人種によって異なっていること、さらに、全体的に見れば親が移民の子どもたちは、アメリカで生まれた両親を持つ子どもたちよりも、成績が高く、数学のテストで高い点を取り、高い進学意欲を持っていることがわかった。この一般化は、人種、民族と親の社会経済的地位の効果を一定にコントロールしたとしても成り立つ。加えて、外国生まれの両親をもつアジア系生徒は、アメリカ生まれの両親をもつアジア系生徒に比べてよくできる。いくつかの質的な研究を基に様々な仮説を考察して、筆者たちはこの結果が、「同化しない適応」(accougdation without assimilation)(例えば、Gibson 1988)と「移民の楽観主義」(immigrant optimism)(Caplan, Choy and Whitmore 1991)という仮説を支持していると結論づけた。これらの仮説に基づいて、筆者たちは、十分な英語技能があつて、期待が高い移民を親にもつアメリカ生まれの子どもたちが、学問的な達成をするために最も適した位置にあるとしている。

またカオは独自に、アジア系アメリカ人の若者の現実がどの位模範的マイノリティのイメージに合っているのかという関心から、1988年全国教育経年調査のデータを使ってアジア系アメリカ人と白人の8年生の数学、読本のテスト得点と成績を比較している(Kao 1995)。質的研究を含む先行研究のレビューから、カオは4つの尺度(家族背景、家族構造、家庭の教育資源と生徒の特性)から学業達成の差異を説明できるとして、統計的モデルを提案している。重回帰分析の結果、中国系と韓国系、東南アジア系は、数学では白人の若者より高い点数を採っていたが、親の社会経済的地位と教育資源がアジア系と白人の数学と読本の平均得点の差を説明することがわかった。また、どの教育意欲のレベルにおいても、アジア系の子どもたちは、白人の子どもたちを上回る成績をとっていた。全般的に見て、この研究ではアジア系がテストの得点

と成績で成功を取めていることがわかったが、この研究での最も重要な成果はアジア系が一律に教育的、経済的に優位なわけではないということであった。アジア系のサブグループの間には、テストの得点、成績、家庭の背景とその資源の活用についての差異があった。この点が、アジア系アメリカ人を均一なグループとして見なす模範マイノリティ説に対する批判であった。

ゴイヤットとシーは、アジア系アメリカ人生徒の高い教育的期待を説明する決定因を調べた (Goyette and Xue 1999)。彼らは1988年全国教育経年調査と同調査の1990年追跡調査のデータを用い、白人よりも高い教育的期待を持っているアジア系のサブグループ (中国系、フィリピン系、日系、韓国系、東南アジア系、南アジア系) に注目した。(教育的期待の年数を従属変数とする) 多変量線形回帰分析と (大学教育を終わるという期待を従属変数とする) ロジスティック回帰分析を用いて、どのように社会経済的背景、テストの得点と子どもに対する親の教育期待などの独立変数が生徒の教育的期待を説明するかを考察した。フィリピン系、日系、南アジア系の場合、社会背景の要因が、教育的期待における白人との差異をかなりよく説明するが、中国系、東南アジア系と白人との差異は説明しないことがわかった。さらに、親の一般的な教育的期待が、アジア系生徒と白人生徒の期待の差異をかなりよく説明することがわかった。ゴイヤットとシーは、アジア系アメリカ人生徒の高い教育的期待は、考察されなかった特質の選別力と移民の経験 (例えば、Gibson & Ogbu 1991) あるいはアジア系アメリカ人が人種差別を克服するための戦略 (例えば、Sue and Okazaki 1990) によって説明できるのではないかと示唆している。

上記にあげた研究は、全て多かれ少なかれ、特に仮説を構築するとき、質的調査を基にした理論を取り入れている。しかし、これらの研究では、理論的な視点や議論を、統計的な分析で操作可能でテストできるような競合する仮説に簡略化してしまう傾向があった。加えて、いくつかの重要な理論的な論点 (例えば、どのように社会歴史的な条件、あるいは社会的要因が教育の結果に影響を与えるのか) は、未だに充分には探求されていない。

V. 近年の質的調査：模範的マイノリティステレオタイプと闘う

チュアは、自分が受けた差別にはほとんど言及していないが、もし不公平な扱いを受けたなら人より倍努力して、人より倍優れていることを示せという教育を受け、それを子どもにも伝えていきたいとしている。このような戦略は、社会経済的に恵まれているからこそ出来るといえる。それでは、チュアのように社会経済的に恵まれていないアジア系アメリカ人たちには、アメリカの教育はどのように働くのであろうか。

教育の質的研究は、1980年代後半から増えてきた。しかし、アジア系アメリカ人の教育経験についての研究は、ステイシー・リーの『「模範的マイノリティ」ステレオタイプを解明する (Unraveling the "Model Minority" Stereotype)』という草分け的な研究が出るまでは、ほんの数冊 (例えば、Gibson 1988) があっただけであった。東海岸の主要都市にある評判の高い公立高校で行った学校のエスノグラフィーで、リーは、どのようにアジア系アメリカ人の生徒が自分たちを認識し、またどのようにそのアイデンティティが彼らの学校体験に影響を及ぼしているのかを調べた (Lee 1996)。リーは、現代の量的な研究を多くレビューすることよりも、それまでほとんどの量的な研究が軽視してきた点にのみその焦点を絞っている。それは、アジア系アメリカ人の内部的な差異の問題であった。これは、直接模範的マイノリティステレオタイプに挑戦することであった。彼女は、アジア系アメリカ人の生徒に4つの異なったアイデンティティあり方を見出している。それは、韓国人と認識する生徒、アジア人と認識する生徒、(ヒップ・

ホップのような対抗文化に位置づける)「新しい波」と認識する生徒とアジア系アメリカ人と認識する生徒であった。この研究の最もユニークな特徴は、筆者が多様なアジア系の民族集団の生徒を参与観察し、その関係性と相互作用を研究したところであった。

重要な事は、リーがアジア系アメリカ人生徒の中でも低学力の生徒について言及し、成功しているアジア系アメリカ人という常識的な概念に対抗している点である (Ibid.)。その意味で、彼女が「新しい波」という抵抗文化に携わっている生徒を含めたことは、この議論を教育の批判的・文化理論 (Apple and Weis 1983; Willis 1977) という新しいトレンドと結びつけることによって、この分野に重要な理論的貢献をもたらした。リーは、「新しい波」の生徒たちは模範的マイノリティステレオタイプのことを強く意識しており、学校で非行行為に走るのには、ステレオタイプにはまりたくないという理由が大きいと説明している。この理論的な進展は、クレイグ・セントリのベトナム人高校生のエスノグラフィー (Centrie 2004) など後の研究に影響を与えている (Cheah 2006; Ngolovoi 2006 など参照)。

リーの2冊めの著書『白人性に立ち向かって (*Up Against Whiteness*)』 (Lee 2005) は、中西部のリベラルな都市の公立高校でのモン族の生徒のエスノグラフィーであった。モン族は、最も近年のアジアから合衆国への難民である。その学校の2千人以上の在籍生徒のなかで、65人がモン族の生徒であった。その高校の生徒の大多数は中産階級家庭出身であったが、モン族の生徒は貧しい家庭から来ていた。この研究では、リーはどのように学校がモン族の生徒たちのアイデンティティを形成するのか、特にレイシズムがモン族生徒のアイデンティティの選択を導き、制限するのかについて着目した。学校文化およびモン族の生徒が学校の中でどのように位置づけられているのかを調べることによって、学校が学業に優れた白人生徒と東アジア人の生徒を優遇し、モン族の生徒は「文化的に異なっている」とか「壊れた家庭」から来ているとして周辺化されていることがわかった (Ibid.: 44-47)。

リーは、2つのタイプのモン族生徒がいるとした。「伝統的」と「アメリカ化した」という2つのタイプの生徒である。伝統的生徒は、近年アメリカに到着した生徒である。彼らは、移民で、ESL (第二言語としての英語) の生徒で、普段両親の言うことをよく聴き、学校ではよく勉強し、服装は保守的である。アメリカ化した生徒は、アメリカ生まれで、たびたび親の権威に反抗し、学校をサボり、ギャングのような服装をしている。アメリカ化した生徒は、学校から疎外されていると感じており、権力に対抗する様式としてヒップ・ホップの格好と文化を身につけている。しかし、彼らは自分自身のモン族の文化を依然維持していて、ほとんどの者がモン族の名前を使い、モン族であることに誇りを持っている。また、モン族の生徒はジェンダーによっても異なった受け取られ方をしている。モン族の男子生徒が、おとなしく、不思議に静かだと教師に見られているのに対して、モン族の女子生徒は、より「普通」だと見られている。また、女子生徒は、モン族の早婚という慣習のために、文化の犠牲になっているとみなされている。結論として、リーは、移民の若者が対抗的なアイデンティティを獲得することを、過剰なアメリカ化の証拠だと見なす部分的同化という見解には限界があると指摘している。リーは、モン族の生徒の対抗的アイデンティティは、彼らが学校やより広い社会で直面する不平等に対する正統な批判を表明していると論じている。

近年出版されたインタビュー中心の大変興味深い研究には、ジェイミー・ルーの『教室の中のアジア系アメリカ人 (*Asian Americans in Class*)』 (Lew 2006) とヴィヴィアン・ロウイーの『優越することを強制されて (*Compelled to Excel*)』 (Louie 2004) がある。ルーは、ニューヨークに住む高校生の年齢の韓国系アメリカ人の若者72人を3年間に渡ってインタビューした。ステイシー・リーの研究と同様、ルーは模範的マイノリティステレオタイプに挑んでいる。理

論的には、彼女の研究はオグブなどによって提起された自律的・非自律的マイノリティ集団という二分法をより拡大し、複雑にすることによってそれに挑戦した。韓国系アメリカ人は、最も高い学力を達成しているアジア民族集団であるが、近年高校中退も増えてきている。ルーは、コリアン・コミュニティ・センターで高卒資格試験（General Education Examination）のために勉強している高校中退の生徒（彼女の72人の標本のうち30人の若者）とエリート公立高校に通う生徒（72人のうち42人）にインタビューし、その経験を比較した。ルーの研究では、彼女自身の調査データに加えて、米国人口統計局の発表したものなどニューヨークに住む韓国系アメリカ人の人口統計を使って、インタビューされた若者たちの簡単な背景を簡単に説明しているので、（彼女は、エスノグラフィによる詳しい記述説明はあまりしていないが）読者はこの研究の文脈を理解することが容易である。実際、質的な研究が量的な情報をあまり用いない傾向がある中で、これは彼女の研究のユニークな特徴だと言えるだろう。

韓国系アメリカ人の中での差異を説明するために、ルーは、家族的背景、親の（教育的）戦略と民族集団同士のネットワークに注目した。エリート高校の生徒の親は、（小規模なビジネスを経営している）中産階級で子どもを放課後塾に通わせたり、家庭教師を付けることができ、韓国教会のメンバーの緊密なネットワークを利用して学校に関する情報を手に入れることができる。これに対して、中退者の親は、（民族ビジネスで雇われている）労働者階級で、帳尻を合わせることに懸命で、エリート高校に通わせている親に比べるとシングルペアレントである可能性が高く、学校についての情報は学校の先生やカウンセラーに頼っているようであった。全体として、ルーは、構造的要因（とりわけ親の社会階級）が生徒の教育的成功に影響を与えていることを強調している。しかしながら、移民の親はしばしばアメリカの（あるいはニューヨーク市の）学校とプログラム（例えば、「マグネット・スクール」と呼ばれるより進んだコースと革新的なプログラムによって、既存の学区を超える広範な都市エリアから生徒を集める公立学校）についての極めて重要な情報を知らないで、学校（とその先生やカウンセラー）がゲートキーパーの役割を果たしていることもわかった（Fix 2007も参照）。

ロウイーの研究は、68人の中国系アメリカ人の大学生のインタビューを分析して、どのように民族文化と階級（社会構造）が彼らの家族と学校体験において相互作用していたか、そしてその相互作用が、彼らの移民の親たちから伝えられた教育意欲の理解にどのような影響を与えたのかを考察した（Louie 2004）。この研究の対象となったのは、アイヴィー・リーグのエリート大学であるコロンビア大学と地域に住む学生を主に受け入れている公立のニューヨーク市立大学システムの主要校の一つハンター・カレッジの2校の学生であった。コロンビア大学の学生の大多数は、近隣の主に白人が住んでいる郊外の中産階級家庭から来ていたが、一方、ハンター・カレッジの学生は、民族集住地域（チャイナタウン）の労働者階級家庭から来ていた。ロウイーは、社会的に主流派の郊外と都市の集住地域という二つの大きく異なった環境で育った中国系アメリカ人がどのように生育し、中国人あるいはアジア人として、どのように人種差別を経験したのかを記述している。さらに、彼女はこれらの学生がそれぞれの大学に進む上で、家族が果たした役割、そして家族の期待との関連で、（キャリアの選択、結婚、宗教、政治的活動など）行っている活動と将来の計画をどのように認識しているかを検討した。

インタビューの中で、学生はアメリカに移民した中国人家族が共通に持っている、教育に対する動機づけと達成について価値システム（例えば、学校で一生涯懸命勉強するという倫理感、家族は子どもたちが学校で成功するよう厳しく強いる）についてたびたび語った。ロウイーは、これを「文化的台本」と呼んでいる（Ibid.: 38）。この台本は、彼らが、アメリカという固有の社会歴史的、人種的文脈をもつ国に移住することによって、このような形に変形・形成されたが、

逆にこの台本によって中国系アメリカ人というアイデンティティが構築されているともいえる。この研究からは、コロンビア大学の学生の進路が直線的だったのに対して、経済的な困難のある多くのハンター・カレッジの学生は、学業の中断、中退、他の学校への転校を経験している。ハンター・カレッジに通っているほとんどの学生は、この大学に来たこと自体が、家族の期待に応えられなかったという、学業の失敗を表していると感じている。同時に、彼らは自分の家族から十分な支援を受けられなかったことは、文化的規範の例外だと説明していた。そうすることによって、ロウイーは、学生たちは依然として中国系、あるいはアジア系アメリカ人の家族は彼らの子どもたちの教育的成功を期待し、そのために強制するという台本を支持していると論じている。

VI. これまでのアジア系アメリカ人についての教育研究と「タイガーマム」

「タイガーマム」が話題になったのは、何と言っても、その子どもに自由を与えずに勉強を強制する、学力（競争）中心の子育て観であろう。それを彼女が、「中国の母親」と「西洋の親」という二項対立にフレームしたところが、反発と大きな議論を呼んだと考えられる（もちろん、チュア自身は、人種・民族的に中国人だから「中国人の母親」になれると考えているわけでもないし、人種・民族的に中国人でも「西洋の親」は少なからずいると考えている）。これは、理想形として、子どもに自由選択を与えない学力中心か、ある程度学力を犠牲にしてでも子どもに自由選択を与えその自律性を重視する子育てかという問題である。チュアの著作がセンセーショナルなところは、彼女がまず本の最初の章で、子どもにさせなかったことの項目をリストアップをしているところである。彼女が、自分の2人の子どもに決してさせなかったのは、以下の9項目だという。

- ・ 友だちと外泊させない
- ・ 子供同士を機会を作って遊ばせない
- ・ 学芸会には出させない
- ・ 学芸会に出なかったことに文句を言わせない
- ・ テレビを見させない、コンピュータゲームをやらせない
- ・ 課外活動を選ばせない
- ・ Aより悪い成績をとらせない
- ・ 体育と演劇以外の科目は1番以外を取らせない
- ・ ピアノかバイオリンを弾かないことを許さない

一方、「中国人の母親」の方も(1)常に学業を優先させる、(2) Aマイナスは悪い評価である、(3)子どもは、クラスの他の子どもに比べて数学では2年先を行かなければならない、(4)人前では子どもを褒めてはいけない、(5)子どもが先生やコーチと意見が合わない場合には、いつも先生やコーチの側に立つべきである、(6)子どもに参加させてもいい活動は、子どもがそのうちにメダルが取れるようなものだけにすべきだ、(7) その場合メダルは金でなければならないという学業、達成中心の非常に達成することが難しい条件が課せられている。もちろんこれは、「べきだ」という理想論には違いないが、家族に経済的、時間的余裕があることが必要条件であろう。そういう意味で、チュアの子育ては、前記のロウイーの研究が指摘した「文化的台本」を具現

化したもので、主流派の郊外に住む中産階級に当てはまる子育てであると言える。

チュアのような教育観は、ある程度その原型が伝統的な中国社会の中にあるということがいえるかもしれない。しかし、アメリカに移民した家族の場合、それに加えて、学業的に成功することによって人種差別を乗り越えなければならない（エンジニア、医師、弁護士、学者など専門職の比較的人種差別に合わないような職種が選べる）という圧力、さらに模範的マイノリティステレオタイプに合わせなければならないという圧力によって支えられていると言えるだろう。確かに、このような教育観に従っているアジア系アメリカ人は相対的には（統計の上では）、教育達成の上では「成功」を収めていると言える。しかし、リーが描いたようなモン族の難民はもちろん、ルーが描いた社会的経済的に恵まれない家庭出身の高校中退者、ロウイーが描いたハンター・カレッジに進学した集住地域から来ている中国移民の学生など「文化的台本」に合わなかった者たちの挫折感は小さくないと推測される。

最後に、この「文化的台本」に従ってやってこれたアジア系アメリカ人にもガラスの壁がないわけではない。近年のデータによれば、アジア系の多いカリフォルニア州などでは公立大学で、在籍者数でアジア系が白人を追い越してしまった大学も少なくない。それに対して、伝統的なエリート校であるアイビー・リーグの大学ではアジア系学生の比率がここ20年間15%前後であり変わっていない。これを差別だとする人々もいるが、実はこれらの大学の入学審査の基準がリーダーシップや創造性、学生の自主的な活動などを重視していて、「文化的台本」とはズレているからではないかと推察される。チュアもこの問題に気がついていないわけではない。『タイガーマム』の最終章では、自律して行く次女が描かれ、コードでは、2人の娘と語る中で、中国と西洋のハイブリッド・アプローチが良いと述べているのである。

参考文献

- Apple, M. W. and L. Weis 1983. *Ideology and Practice in Schooling*, Philadelphia: Temple University Press.
- Barringer, H. R., D. T. Takeuchi and P. Xenos 1990. "Education, Occupational Prestige, and Income of Asian Americans", *Sociology of Education*, 63(1), pp.27-43.
- Brown, K. D. 2005. "C'mon, Tell me. . . Does School Ethnography Really Matter?", *Educational Researcher*, 34(9), pp.29-34.
- Caplan, N., M. H. Choy and J. K. Whitmore 1991. *Children of the Boat People: A Study of Educational Success*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Centrie, C. 2004. *Identity Formation of Vietnamese Immigrant Youth in an American High School*, New York: LFB Scholarly Publishing.
- Cheah, S. 2006. Identity Formation of Vietnamese Youth, retrieved from [http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_CHEAH\(SEP06\).pdf](http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_CHEAH(SEP06).pdf)
- Chua, A. 2011. *Battle Hymn of the Tiger Mother*, New York: Penguin Books.
- Chun, K.-T. 1980. "The Myth of Asian American Success and its Educational Ramifications", *IRCD Bulletin*, Winter/Spring, pp.1-12.
- Fix, R. 2007. "Overturning Stereotypes: Why Race, Class and Schooling Resources Matter to Korean American Youth", retrieved from [http://www.gsa.buffalo.edu/BOOKREVIEWS_FIX\(MAR07\)](http://www.gsa.buffalo.edu/BOOKREVIEWS_FIX(MAR07)).

- Gibson, M. A. 1988. *Accommodation Without Assimilation: Sikh Immigrants in an American High School*, Ithaca: Cornell University Press.
- _____ and J. U. Ogbu (eds.) 1991. *Minority Status and Schooling: A Comparative Study of Immigrant and Involuntary Minorities*, New York: Garland.
- Goyette, K. and Y. Xie 1999. "Educational Expectations of Asian American Youths: Determinants and Ethnic Differences", *Sociology of Education*, 72(1), pp.22-36.
- Hardy, D. M. 2006. "Schools and Immigrant Youth", retrieved from [http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_HARDY\(SEP06\).pdf](http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_HARDY(SEP06).pdf).
- Hirschman, C. and M. G. Wong 1986. "The Extraordinary Educational Attainment of Asian-Americans: A Search for Historical Evidence and Explanations", *Social Forces*, 65(1), pp.1-27.
- Inokuchi, H. and Y. Nozaki 2005. "The Question of Identity and Differences: The Resident Korean Education in Japan", in Y. Nozaki, R. Openshaw, and A. Luke (eds.), *Struggles over Differences: Curriculum, Texts, and Pedagogy in the Asia-Pacific*, Albany: State University of New York Press, pp. 199-215.
- Kao, G. 1995. "Asian Americans as Model Minorities? A Look at their Academic Performance", *American Journal of Education*, 103(2), pp.121-159.
- _____ and M. Tienda 1995. "Optimism and Achievement: The Educational Performance of Immigrant Youth", *Social Science Quarterly*, 76(1), pp.1-19.
- Lee, E. S. and X.-l. Rong 1988. "The Educational and Economic Achievement of Asian-Americans", *Elementary School Journal*, 88(5), pp.545-560.
- Lee, S. J. 1996. *Unraveling the "Model Minority" Stereotype: Listening to Asian American Youth*, New York: Teachers College Press
- _____ 2005. *Up Against Whiteness: Race, School, and Immigrant Youth*, New York: Teachers College Press.
- _____ 2006. "Additional Complexities: Social Class, Ethnicity, Generation, and Gender in Asian American Student Experiences", *Race, Ethnicity and Education*, 9(1), pp.17-28.
- Lew, J. 2006. *Asian Americans in Class: Charting the Achievement Gap among Korean American Youth*, New York: Teachers College Press.
- Louie, V. S. 2004. *Compelled to Excel: Immigration, Education, and Opportunity among Chinese Americans*, Stanford: Stanford University Press.
- Mohanty, C. T. 1991. "Introduction: Cartographies of Struggle, Third World Women and the Politics of Feminism", in C. T. Mohanty, A. Russo and L. Torres (eds.), *Third World Women and the Politics of Feminism*, Bloomington: Indiana University Press.
- Ngolovoi, M. S. 2006. "Moving Beyond Stereotypes", retrieved from [http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_NGOLOVOI\(SEP06\).pdf](http://www.gsa.buffalo.edu/AAMMM/BOOKREVIEWS_NGOLOVOI(SEP06).pdf).
- Nozaki, Y. 2000. "Essentializing Dilemma and Multiculturalist Pedagogy: An Ethnographic Study of Japanese Children in a U.S. School", *Anthropology and Education Quarterly*, 31(3), pp.355-380.
- Ogbu, J. U. 1987. "Variability in Minority School Performance: A Problem in Search of an Explanation", *Anthropology and Education Quarterly*, 18(4), pp.312-334.
- _____ 1991. "Immigrant and Involuntary Minorities in Comparative Perspective", in M. A. Gibson and J. U. Ogbu (eds.), *Minority Status and Schooling: A Comparative Study of Immigrant*

- and Involuntary Minorities*, New York: Garland, pp. 3-33.
- Omi, M. and H. Winant 1986. *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1980s*, New York: Routledge & Kegan Paul.
- Palumbo-Liu, D. 1999. *Asian/American: Historical Crossings of a Racial Frontier*; Stanford: Stanford University Press.
- Petersen, W. 1971. *Japanese Americans: Oppression and Success*, New York: Random House.
- Rong, X. L. and L. Grant 1992. "Ethnicity, Generation, and School Attainment of Asians, Hispanics, and Non-Hispanic Whites", *Sociological Quarterly*, 33(4), pp.625-636.
- Spindler, G. D. 1987. "The Transmission of Culture", in G. D. Spindler (ed.), *Education and Cultural Process: Anthropological Approaches*, Prospect Heights, IL: Waveland Press, second edition, pp.303-334.
- Sue, S. and S. Okazaki 1990. "Asian-American Educational Achievements: A Phenomenon in Search of an Explanation", *American Psychologist*, 45, pp.913-920.
- Suzuki, B. H. 1977. "Education and the Socialization of Asian Americans: A Revisionist Analysis of the "Model Minority" Thesis", *Amerasia Journal*, 4, pp.23-51.
- Trueba, H. 1987. *Success or Failure? Learning and Language Minority Student*, Cambridge: Newbury House.
- Trueba, H. T. 1988. "Culturally Based Explanation", *Anthropology and Education Quarterly*, 19(3), pp.270-287.
- Willis, P. 1977. *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, New York: Columbia University Press.